

所属 文学部 職名 教授

氏名 細谷 広美

< 研修概要 >

1. 概要（研修先）

ニューヨークにあるコロンビア大学の人権研究所（Institute for the Study of Human Rights）に客員研究員として所属し、研修をおこなった。受け入れ教員は、同研究所の先住民族の権利プログラムの初代ディレクターの Elsa Stamatopoulou 教授であった。Stamatopoulou 教授は、長年にわたって国際連合で人権、なかでも先住民の権利に取り組んでいてらっしゃり、2003年に誕生した「先住民問題に関する国連の常設フォーラム」の初代事務局長を務められた方である。さらに、国際法の専門家として、先住民の権利に関する研究を数多く出版されてきている。

研修者は文化人類学を専門とするが、コロンビア大学は、「文化人類学の父」とされるフランツ・ボアズが、アメリカ合衆国ではじめて文化人類学の博士課程を設立した大学であり、アルフレッド・クローバー、ルース・ベネディクト、マーガレット・ミード、ハーレム・ルネサンスにかかわったゾラ・ニール・ハーストン、メキシコのマヌエル・ガミオ等学説史に残る名だたる人類学者を輩出してきている。

2. 研究テーマ「グローバル化が進む 21 世紀における「先住民性」をめぐる研究」

人権の時代といわれる今日、国際社会において先住民（先住民族）の権利をめぐる様々な取り組みがおこなわれており、世界の先住民数も増大している。しかし、先住民とは誰であるかという点は、従来国民国家形成過程のなかで、各国において独自に定義されてきた。このため、グローバル化が進展するなか、先住民という存在の再配置が起こっている。研修では、国際社会における先住民の定義及び「先住民性」とローカルな現場の節合における動態を、ラテンアメリカ地域を中心にアイデンティティ・ポリティクスとの関係等を視野に入れ、主に文化に焦点をあて調査研究を実施した。

このため、実務面で国際連合において先住民の権利に長年にわたって取り組んできているだけでなく、研究者として執筆活動をされてきている Stamatopoulou 教授に受け入れ教員になっていただいた。面識がなかった研修者を受け入れて下さった Stamatopoulou 教授の御厚情に心から感謝する。研修者はこれまでラテンアメリカの現場から先住民文化、社会をみてきたが、国連の側から関わっていらした先生の授業を聴講させていただき、オープンマインドの先生と意見交換をさせていただけたことは、研究の進展において極めて意義が大きかった。先生が関わり学内で定期的開催される先住民研究に関するセミナーにも参加させていただいた。

また、コロンビア大学があるニューヨークには国連本部があり、所属研究所もアドボカシー・プログラムを実施しているため、国連でおこなわれる様々な活動に参加した先住民団体や先住民運動のリーダーたちが、大学でのイベントに参加するため、活動の実際を垣間見ることができた。なかでも、元ペルー国会議員であり、先住民運動の

女性リーダーの一人であるタニア・パリオナ氏と知遇を得ることができたことは大きい。

コロンビア大学では、日本ではまだ研究が進んでいないラテンアメリカの現代美術に関する授業、エミー賞を受賞した教員によるスマートフォンを用いてニューヨークの社会的課題を扱うドキュメンタリーを制作する授業、LATINX（ラティーノ/ラティーナ）に関する研究で知られる EVO MORALES 博士の授業等を聴講させていただいた。スマートフォンを用いてドキュメンタリーを制作する授業では、学生たちのプロジェクトに加えていただきテキサス州からバスで送られてきた移民にインタビューをした。テキサス州知事が聖域都市にバスで移民を送り込むことをはじめた2022年以降、ニューヨーク市にはラテンアメリカ・カリブ海地域からの人びとを中心に約17万人の移民が移送されており、シェルターの対応も追いつかず、大統領選挙とも関係する社会課題となっている。

また、マンハッタンに位置する地の利を生かし、ニューヨーク大学、ニューヨーク市立図書館、MOMA、ホイットニー美術館、The Shed、メトロポリタン美術館等で開催された各種シンポジウム、講演会等にも参加することができた。ニューヨーク市及びニューヨーク近郊在住の研究者の方たちとの交流にも恵まれた。

特筆すべきは文献研究を進めるうえでの図書館利用で、従来のように図書館に行き文献を借りて読むことや、コピーをする必要なく、多くの文献資料にパソコン経由で、いつでもどこからでもアクセスでき、（一部制約があるとはいえ）ダウンロードすることができた。複数の大学図書館間で相互借り入れしているため、アクセスできる文献資料の幅も広がった。さらに、資料利用をめぐる様々なワークショップが頻繁におこなわれているだけでなく、専門の図書館員により、具体的なテーマに関する資料探しのサポートも受けることができた。日本では経費削減のために司書の方を非常勤に変える機関が少なくないが、このような恵まれた研究環境にある研究者や大学院生たちと、日本の研究者が対等に競っていかなければならないことは、今後ますますハンディになると痛感した。

3. 研究成果

【出版・刊行物】

☆“Afectación de testimonios y jerarquía de víctimas: los sucesos de Uchuraccay como “zona de contacto” (「証言をめぐる情動と犠牲者のヒエラルキー：「コンタクト・ゾーン」としてのウチュラハイ事件」) + *Memoria(s)*. No.4 pp.213-237 *Revista Académica del Lugar de la Memoria, la Tolerancia y la Inclusión Social (LUM)* . 2023

同雑誌は、ペルー国立の記憶の博物館「記憶の場、寛容と社会的包摂」(LUM)が、真実和解委員会20周年を記念して特集を組み刊行された。同館館長の歴史学者マヌエル・ブルガ博士の依頼により寄稿し、カリフォルニア大学の著名な歴史学者チャーリー・ワーカー教授らによって紹介された後、オンライン公開されている。

<https://lum.cultura.pe/publicaciones/memorias-n%C2%BA-4-revista-acad%C3%A9mica-del-lum>

☆「「真実」の万華鏡（カレイドスコープ）：ペルー真実和解委員会と平和構築」季刊民族学 186 巻 pp. 26-33 2023 年

☆『世界の冠婚葬祭』丸善出版 2024 南米地域の編集担当とともに、ケチュア族について執筆 2024 年

☆「レタプロ：先住民映画と LGBTQ」第 2 回ペルー映画祭パンフレット ブエナワイカ 2023 年

☆ドキュメンタリー映画『ルカナマルカの記憶』エクトル・ガルベス、カルロス・カルデナス監督 字幕監修 ブエナワイカ 2023 年

☆「人権の外延：グローバル化と哀悼可能性」（仮題）『グローバル・スタディーズ叢書 第 3 巻』 東信堂（2024 年 出版予定）

【研究成果をもとにした学会発表予定】

☆第 45 回日本ラテンアメリカ学会（於慶應大学 2024. 5. 25-26）「レタプロ作家たちの軌跡：アート、クラフト、ツーリスト・アートの境界」パネル「現代ラテンアメリカ民衆芸術とその諸相」（本谷裕子代表）

☆第 58 回日本文化人類学会（於北海同大学 2024. 6. 15-16）「先住民性の内面化、「誤謬」の射程」

☆The 8th Annual Conference of the Memory Studies Association, 'Memories in Transit', Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, 18-20 July 2024.

“ Kaleidoscope of "Truths": Truth, Memory, and History following the Truth and Reconciliation Commission of Peru”

【講演等】

国立民族学博物館で開催された特別展「ラテンアメリカの民衆芸術」の実行委員を務めるとともに、以下を実施した。

☆国立民族博物館 みんなくゼミナール

「記憶と抵抗のメディアとしての民衆芸術」2023 年 4 月 15 日

☆国立民族学博物館 研究公演「ペルーアンデスの民衆の歌」解説 2023 年 4 月 22 日
ペルーアヤクチョ県出身で歌手のイルマ・オスノさんと、ギター奏者の笹久保伸さんによるコンサートを実施し解説を務めた。先住民言語ケチュア語による伝統的音楽のコンサートであったが、事前申し込み制の 400 名の定員がすぐに満席御礼となり大変好評だった。

【国際学会への出席】

両学会とも、ラテンアメリカ・カリブ海地域研究、及び文化人類学研究に関する世界最大の学会であるため、パネル数が多く通常は会期を通じて参加することが難しいが、研修中であるために最後まで参加することが可能となった。

☆Latin American Studies Association (LASA 於バンクーバー)

☆American Anthropological Association (AAA 於トロント)

【日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究】

☆基盤研究B「ラテンアメリカの民衆芸術に関する文化人類学的研究」(代表鈴木紀 国立民族学博物館 JP21H00655) 8月にペルーで調査をし、資料収集と民衆芸術家たちへのインタビューをした。また、北米最大規模のアートフェアであるアートバーゼル・マイアミ・ビーチで現代美術と先住民芸術の関係を、マーケットを視野に入れて視察した。さらに、ペルーの先住民村出身で、国内避難民として首都に移住した後、アメリカ合衆国に移住し、現在はマイアミ在住で、国境を越える移民をテーマにレタブロ作品を制作しているニカリオ・ヒメネス氏の工房を訪れ、インタビューをした。ニカリオ氏の作品はスミソニアン博物館のパーマネントコレクションにもなっている

☆基盤研究B「ラテンアメリカにおける政治的カタストロフ後の日常的位相」(代表石田智恵 早稲田大学 JP18H03453) オンラインを通じて研究会に参加した。

【その他】

☆ニューヨーク大学で開催されたラテンアメリカ先住民映画フェスティバルに参加。

☆ニューヨーク大学でケチュア語を教えていらっしゃる Odin Gonzalez 博士の授業に招かれ、受講学生たちにアンデスと日本の文化について話すとともに、ケチュア語で会話をし交流をした

☆ハーバード大学デヴッド・ロックフェラーセンターで開催された、同センター刊行の雑誌 ReVista の特集号 Indigenous Voices: Heritage, Challenges, Rights の刊行記念会に参加した。同特集号の編者で、北米の高等教育機関でケチュア語を教える教員や、高等教育機関で学ぶケチュア語話者の学生組織、The Quechua Alliance の共同創設者の Américo Mendoza-Mori 博士にお話を伺った。

生活面では、新型コロナウイルス感染拡大後のインフレと急激な円安により、もともと物価が高いニューヨーク市での滞在及び出張は経済的に非常に苦しいものとなった。特に、家賃の平均が月額約 5000 ドル（日本円で 80 万円弱）まで高騰したなかでの家探しは大変だった。また、高額な医療費と医療の壁にも苦労した。

最後に、海外長期研修制度を通じて、海外での調査研究活動を可能にし、知見を広げる機会を与えて下さった成蹊学園、大学に心から感謝いたします。